

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720250

研究課題名(和文) コンピューターを用いた対面インタラクションにおける英語学習者の会話行動

研究課題名(英文) Face-to-face computer-mediated second-language learning

研究代表者

クルーグ ネイサンポール (KRUG, Nathan Paul)

埼玉大学・英語教育開発センター・准教授

研究者番号：40549995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本の英語学習者は日常生活の中で英語で会話を行う機会が限られている。そのような環境では、コンピューターを用いたコミュニケーション(CMC)が日本国内の者同士、または海外に住む者との英語を用いたコミュニケーションの機会を提供できる可能性がある。そこで、筆者は、学習者が教室外でコンピューターを用いて行うビデオチャットの対面インタラクションを会話分析し、それが英語学習、交互行為能力を伸ばすためにどう活用できるかを検討した。

研究成果の概要(英文)：Computer-mediated environments are no doubt useful for language learning in the EFL situation, however only following closer scrutiny can CMC truly serve pedagogical objectives. Therefore, the overarching purpose of this study was to analyze the talk-in-interaction in L2 video-based CMC conversations so as to (1) portray the features of CMC talk (including the organization of the talk, such as the distribution of turn taking, sequence and repair), and to (2) explore how L2 learning progresses taking note of all resources by which language learning is best facilitated through the CMC environment.

研究分野：応用言語学

キーワード：CMC 英語学習 会話分析 学習者の会話 会話行動

1. 研究開始当初の背景

近年、教室外で行われる母語話者 (NS) と非母語話者 (NNS) による会話を会話分析の手法で分析する研究が増えてきている。例えば、Gardner and Wagner (2004) には NNS の参加する会話を対象とするさまざまな研究論文が集められている。また、Seedhouse (1998) は会話分析の手法がどう NS と NNS との会話の分析に応用できるかについて論じている。他にも、Carroll (2005) などさまざまな研究が、第二言語使用にまだ困難のある NNS がいかに言語・非言語的リソースを用いてインタラクションを遂行しているかを明らかにしてきた。本研究を開始する以前から、筆者も日本人英語学習者を対象とし、会話分析を行っており、学習者の相互行為能力を記述してきた (Otsu & Krug, 2010; Krug & Otsu, 2011a, 2011b)。

日本の英語学習者は日常生活の中で英語で会話を行う機会が限られている。そのような環境では、コンピュータを用いたコミュニケーション (CMC) が日本国内の者同士、または海外に住む者との英語を用いたコミュニケーションの機会を提供できる可能性がある。そこで、筆者は、学習者が教室外でコンピュータを用いて行うビデオチャットの対面インタラクションを会話分析し、それが英語学習、相互行為能力を伸ばすためにどう活用できるかを検討することにした。

2. 研究の目的

英語を外国語として話す (EFL) 環境では、CMC が英語学習に役立つことは明白のように思われる。しかし、具体的に CMC がどう教育・学習に貢献するものなのかを知るためには、詳細な会話の分析が必要となるであろう。そこで、本研究は、日本人英語学習者の参加するビデオチャットを会話分析し、(1) その会話の特徴 (ターン取り、隣接対といった会話のしくみなど)、(2) 学習者がどのようにビデオチャットの中で英語学習を行っているのかということについて論じる。

3. 研究の方法

日本人英語学習者の参加するビデオチャットの会話の特徴、そして、そこでどのように英語学習が行われているのかを記述するため、本研究は、社会文化的視点に立って、学習は実際の状況の中で行われる活動の中で具現化されるものと考え、会話分析の手法を用いてホリスティックな分析を行い、会話における言語・非言語的特徴を詳細に記述する。

日本の大学に交換留学生として短期間滞在し、日本語を学ぶ留学生と英語を学ぶ日本人学生がともに目標言語を学び合えるように、言語学習パートナーとして紹介するプログラムが大学で行われている。パートナーのマッチングがなされると、1回目の会話は、ビデオチャットで、英語で会話を行うことになっている。そして、そこで実際に会う約束

をし、2回目は日本語で会話を行うことになっている。話題や会話時間の制限は特にされていない。

本研究が用いたデータは、その1回目の英語によるビデオチャット 30 件である。会話参加者の一人は日本人英語学習者で、その相手は英語母語話者、または、それに近い上級学習者である。各ペアの会話時間はおよそ 20 分で、コンピュータスクリーンの記録ソフトウェアによる録画、部屋に設置されたビデオカメラによる録画、IC レコーダによる録音をデータとした。なお、会話の後に、言語学習パートナープログラム向上のために、アンケート調査も行われている。

4. 研究成果

(1) CMC 環境リソースの利用

会話参加者達がビデオチャットを行ったコンピュータ上には、英語辞書、ウェブ上の地図やホームページの参照、テキストメッセージの使用といったリソースがあり、日本人英語学習者の英語力の不足から、そういったリソースが利用されることが予測された。しかし、実際には、会話参加者達は会話開始から終了まで終始言葉と表情や身体によるインタラクションに集中し、CMC 環境リソースの利用はほとんど見られなかった。相手に通じない言葉や連絡先の詳細をめぐるやりとりに、テキストメッセージの使用が数件見られたが、それよりも、紙とペンが多く使われていた。本研究がデータとした会話が初対面状況のものであったため、お互いに関する情報を集めることに集中していたため、そのような結果になったのではないと思われる。

(2) 会話開始部

電話会話の開始部を分析した Schegloff (1986) によると、一見ルーティンのように見える開始部も実際は会話参加者双方の協力によってなされている。会話を開始させ「Anchor Point」にたどり着くまでに、時間がかかることもある。

本研究の分析の対象となったすべての会話で、英語によるコミュニケーションの困難さにもかかわらず、30 件すべてが会話開始に成功していた。

例 1 は、その一例である。Meiko が 1 行目で Frederick からのコールを受け、会話開始部が終わり、27 行目で「conversation-for-learning」(Kasper, 2004) を始める。会話開始部では、さまざまな合図を用いながら、会話が進められている。相手のスクリーンへの出現を認識したことを伝える「change-of-state token」、相手の名前を正しく発音したことを承認する発話、会話開始部を閉じ、次のステージへと進むきっかけとなる「Nice to meet you.」という挨拶などである。それぞれの合図の後には、20 行目の「Hmn.」のような承認のトークンや笑いが続き、相手にそれ以上の発話の追加は不要で

あること、意図が理解されたことが示される。

本研究のデータであるビデオチャットの開始部は、電話開始部と多くの共通点があるものの、会話参加者同士が初対面であることから、音声だけでなくカメラも用いられていることから、異なる部分もある。例1を見ればわかるように、開始部の連鎖は「Summons-Answer」という隣接対（1-6行目）、あいさつ（6-7行目）、自己紹介（13-19行目）、「Nice to meet you」の交換（23-25行目）のように続いていく。ペアによっては、互いの名前が外国の聞きなれないものであったため、名前の交換が長引く場合もあった。

Extract 1: Frederick and Meiko

```

01 ((ring and connecting sound effect))
02 M: Oh, huhha (0.4)
03 F: Oh, shuhha
04 M: Huhha
05 F: eHe:llo?e
06 M: Hello how are you, (1.7) ((computer volume is increased))
07 F: I'm fine. And you?
08 M: eI'm f:i(hh)nef but a little nervous huhha >.hhhh
09 F: a:h it's okay me too? [.snchh ]
10 M: [=Hmn,=]
11 F: Mmn (.) I'M Frederick?
12 M: Frederick,
13 F: And you are ? [Yeah]
14 M: I'm Meiko,
15 F: Meiko?
16 M: Meiko yes.
17 F: Hmn.
18 M: Huhha
19 F: [eI'm n. O k a y,fi]
20 M: [eNice to meet you.fi]
21 F: Huhhaa
22 M: eNice to meet you too.f Shuh [huh ha .s]hh [Huhhahmm]
23 M: ah:m, (0.5) how old are you?
24 F: ((conversation continues))

```

Annotations in the image:
 - Line 11: "First topic (Obligatory topic)"
 - Line 23: "Second topic (First free topic)"

(3) 会話の進め方

日本人英語学習者の会話相手は英語母語話者または上級英語学習者であるため、会話をリードしていき、日本人英語学習者がそれについていくことが予想される。そして実際にそのような会話の進め方がなされることもあった。

例2がその例である。Shin（日本人英語学習者）はこの例の直前まで Ricky（上級英語学習者）と将来の職業について話していた。1-3行目で、ぎこちなさはあるものの Shin は相手に質問をしていた。しかし、Ricky は4-20行目で、Shin から出身国を聞かれた（3行目）のを受けて、逆に Shin に自分がどこ出身だと思ふ当てさせるゲームのようなことを始め、会話の主導権を取っている。

Extract 2 - Shin and Ricky

```

1 S: hh .hh eh- you will (0.2) a jo:b (0.4) Japanese or (0.2)
2 ah! what from (.) *fr:om,* (0.2)
3 where from.
4 R: hhuh whadd'you [think. hh hh .hh hh hh ]
5 S: [ > ah ( ) from countr- < from country]
6 R: whadd'you think?
7 S: eh? (.) why you (.) from?
8 R: yeah !whadda you think where I'm from.
9 S: a::h (.) eh- Australia?
10 R: Australi- a:h no hhuh .huh
11 S: n(h)o hah [.hh]
12 R: [no:
13 S: e >e- muzza tongue< i:s English?
14 R: no
15 S: NO:
16 R: no it's not English
17 S: o::h (1.0) e::r (0.6) e- Euro- pa:=
18 R: =ye:p
19 S: (0.3) e::h (0.3) e::h (0.3) Franc:e?
20 R: >nope< (.) huh huh .hh Germany, *it's [G e r m a n y *] yeah (.) .si
21 S: [ >ah Germany::.<]

```

一方、日本人英語学習者が会話をリードすることもある。例3は、例2の直後に起こった会話であるが、この部分は Shin がリードしている。ここでは、会話参加者たちは日本のある町の位置について話している。Shin 自身の出身地、現在住んでいる町のことなど、日本のことについては、Shin は Ricky より多くの知識を持っている。そこで、流暢さに欠け、文法的誤りもたくさんあるものの、Shin は29-32行目で「福岡」のスペルを相手に伝え、相手はその発音などをよりはっきり理解できるようにリードしている。さらに、24、35、40、47、48行目では、Ricky にとって最も必要な情報が提供できるように、情報提供に先立って、相手に質問をしている。

Extract 3 - Shin and Ricky

```

22 R: yeh! it's Germany (0.2) and u:m d'you live here >in in< Saitama:? or, (0.6)
23 S: um (.) no:w: I live in >Saitama (but ah)< .hh I'm from (.) Fukuoka? (0.4)
24 R: Fuka:
25 S: >Fukuoka<
26 R: Fuoka?
27 S: <"Fukuoka"> eff you? (0.8)
28 R: kay o::h (0.4) ar- ah! eff you key- >kay you< (0.2)
29 o:h kay ay (0.5)
30 [<"Fuku">]
31 R: [ Fuku ]oka ah::: (0.2) understand
32 S: do you know Fukuoka.
33 R: mmm not really where [is it exactly]
34 S: [ha ha ha .hh]
35 mor- more west tha:n (.) Kyoto or Nara: (1.0)
36 [ >do you know< Kyoto or Nara
37 R: [ oh really ]
38 that fair?
39 S: (0.4) yes yes yes lefto far (0.4) from (.) thi- (.) this [region] ["an ah"]
40 R: >an an< where di- where ah- you live there
41 S: ah I'm livi:ng (0.2) near za (.) hh university (0.3)
42 a:h (0.6) e::tto (0.2) d'you know h:igh school (0.2) Urawa Kita? (0.3)
43 Urawa Kita High School?
44 R: yea yeah yeah
45 S: na- nea- near za- dis (.) s- school. [ I live ]
46 R: [ >ah okay<]
47 (1.0)

```

(4) まとめ

紙幅の都合で全てを本稿に含めることはできないが、多くのペアに見られた活動などは、お互いについて当てさせるようなゲーム、日本人英語学習者・その会話相手によるインタビューのような質問の繰り返し、コメント、誤解が生じたときの突然のトピック変え、言葉の教授・学習、次回会う日時の相談、会話終了などである。

本研究の結果は、英語コースのカリキュラムデザインや、異文化間コミュニケーション教育に応用できる可能性がある。今後も、英語非母語話者を含む会話の分析を続け、会話を通じて、どうアイデンティティーが表示されるかなど、研究を続ける必要がある。

(引用文献)

- (1) Carroll, D. (2005). Vowel-marking as an interactional resource in Japanese novice ESL conversation. In K. Richards & P. Seedhouse (Eds.), *Applying conversation analysis* (pp. 214-234). Basingstoke, NY: Palgrave.
- (2) Gardner, R. and Wagner, J. (2004).

Second Language Conversations. London: Continuum.

- (3) Kasper, G. (2004). Participant orientations in German conversation-for-learning. *Modern Language Journal*, 88(4), 551-567.
- (4) Krug, N. P., & Otsu, T. (2011a). "Becoming next speaker: Attracting attention in group talk." Paper presented at *The 3rd Annual N.E.A.R. Language Education Conference*, International University of Japan, Niigata (Japan), May.
- (5) Krug, N. P., & Otsu, T. (2011b). Becoming next speaker: Learners' self-selection in group talk. *The Third Annual NEAR Language Education Conference* (pp. 1-11). Niigata, Japan: International University of Japan.
- (6) Otsu, T., & Krug, N. P. (2010). "Small-group interaction: Turn-taking practices." Paper presented at *The 18th International Conference on Pragmatics and Language Learning*, Kobe University, Kobe (Japan), July.
- (7) Schegloff, E. A. (1986). The routine as achievement. *Human Studies*, 9(2-3), 111-151.
- (8) Seedhouse, P. (1998). CA and the analysis of foreign language interaction: a reply to Wagner. *Journal of pragmatics*, 30, 85-102.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- (1) Krug, N. P. (Forthcoming). Nonformal institutional conversation: When do second-language speakers stop being second-language learners? *The 7th Annual NEAR Language Education Conference*. Niigata, Japan: University of Niigata Prefecture. 査読なし
- (2) Otsu, T., & Krug, N. P. (2013). Turn-taking practices in conversation-for-learning. In T. Greer, D. Tatsuki & C. Roever (Eds.), *Pragmatics and Language Learning*, 13 (pp. 79-102). Honolulu, USA: The University of Hawai'i at Mānoa. 査読あり
- (3) Krug, N. P., & Otsu, T. (2012). Refraining from becoming the next speaker: A case study of second-language conversation-room interaction. *Proceedings of the 19th Korea TESOL International Conference* (pp. 251-259). Seoul, Korea:

Sookmyung Women's University. 査読あり

[学会発表] (計11件)

- (1) Krug, N. P. (2015). "Nonformal institutional conversation: When do second-language speakers stop being second-language learners?" Paper presented at *The 7th Annual NEAR Language Education Conference*, University of Niigata Prefecture, Niigata-shi, Niigata (Japan), 23 May.
- (2) Krug, N. P. (2015). "Second Language Conversations: Just who is 'Novice' or 'Expert'?" Data Session. Conversation Analysis Network Kansai, Temple University, Osaka-shi, Osaka (Japan), 17 March.
- (3) Krug, N. P. (2014). "Learning in L2 conversation: When does 'learning' occur?" Data Session with Professor Rod Gardner (Griffith University). Queensland University of Technology, Brisbane (Australia), 7 March.
- (4) Krug, N. P. (2013). "Second-language conversations: Ever-shifting roles of 'novice' and 'expert'." Data Session. The University of Hawai'i at Mānoa, Hawai'i, Honolulu (USA), 20 September.
- (5) Krug, N. P. (2013). "Arriving at the 'anchor point': Cues deployed in openings of computer-mediated second-language conversations." Paper presented at *The 13th International Pragmatics Association Conference*, India Habitat Center, New Delhi (India), 12 September.
- (6) Krug, N. P. (2013). "Cues in Opening Sequences of CMC Calls (Toward the 'Anchor Point')." Data Session. Conversation Analysis Network Kansai, Kansai University, Suita-shi, Osaka (Japan), 23 March.
- (7) Krug, N. P. (2013). "Language Learning in International Skype Video Calls." Paper presented at *International Symposium: Social Interaction in International Encounters*, Kansai University, Suita-shi, Osaka (Japan), 5 March.
- (8) Krug, N. P. (2012). "So, what's your name?: Opening sequences in computer-mediated conversation-for-learning." Paper presented at *The 43rd Annual Conference of the Australian Linguistics Society*, The University of Western Australia, Perth (Australia), 07 December.

- (9) Krug, N. P. (2012). "Opening Sequences of CMC Video Calls." Data Session. Conversation Analysis Network Kansai, Kansai University, Suita-shi, Osaka (Japan), 03 November.
- (10) Otsu, T., & Krug, N. P. (2012). "Rethinking competence: Learners' perceptions of their interactional practices." Paper presented at *The Fifth Annual N.E.A.R. Language Education Conference: All is New Again: New Experiences, New Challenges, New Voices*, University of Niigata Prefecture, Niigata-shi, Niigata (Japan), 26 May.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

クルーグ ネイサン ポール

(KRUG, Nathan Paul)

埼玉大学・英語教育開発センター・

准教授

研究者番号：40549995